

**2025（令和7）年度沖縄県若年性認知症支援推進事業  
若年性認知症本人交流会・本人ミーティング「同士の会」 報告書**

- 日時：令和7年7月30日（水）12:00～15:30 ※研修・台風で2回延期開催
- 会場：糸満市 飲食店
- 参加者：合計9名 本人：3名+ゲスト1名（65歳以上）、支援者：2名、行政担当者1名  
調査会社1名、ゲスト家族：1名

**○ 開催目的**

若年性認知症の本人同士が自らの体験や希望、必要としている事を語り合い、自分達のこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場づくりを目指す。

**○ 会の内容と主なやりとり**

- ・参加者はそれぞれ、自身の病状や診断時の戸惑い、診断後の受け止め方、記憶障害に対する心構えや対応策などを率直に語り合った。
  - ・初参加の当事者は、「大城さん（沖縄県認知症希望大使）のテレビでの発言に感動し、勇気を出して参加した」と述べた。
  - ・希望大使の新里さんは、「自分も大城さんの言葉に励まされ、同じように困っている人のために声を上げたいと思い、大使としての活動を始めた」と語った。
  - ・趣味でトランペットを演奏している当事者の話をきっかけに、同世代ならではの音楽や好きなアーティスト、アクセサリやファッションの話、日常生活におけるバス移動の難しさなど、多彩な話題で盛り上がった。
- 自然な交流の中で話が尽きず、2時間以上にわたって和やかかつ充実した会となった。

**○ 話し合いを通して浮かび上がった課題：移動手段の困難さ**

- ・当事者同士および行政担当者とのやり取りの中で、共通する深刻な課題として「移動の困難さ」が浮き彫りとなった。特に大城さんは、「バスの乗り換えが難しく、タクシーを利用しているが、毎回使えるわけではなく負担が大きい」と述べた。このような状況が続くと、外出そのものが難しくなり、自宅に閉じこもることが増えるという実態が語られた。「どこかに行きたいと思っても、移動手段の確保が最大の障壁になる。もし公的な補助があればとても助かる」と支援の必要性を訴えた。

**○ 行政担当者の参加と意見**

- ・沖縄県の認知症政策担当者と関係者が来訪し、「認知症バリアフリー」に関するアンケート調査の参考として、当事者の聞き取り調査を実施。
- ・初めて認知症の当事者と直接対話したが、「当事者が自らの経験を落ち着いて語り、他者への助言として共有している姿にこれまでの認知症のイメージが変わった」と感想を述べた。
- ・また、「認知症＝高齢者がすべてを忘れてしまう病気」という固定観念が大きく変わり、当事者の意思発言力があり、自身で考えて行動する力があるという認識が深まったとも語っていた。

○ 今後に向けて

同士会は、当事者にとって安心して語れる場であり、今後も継続的な開催が望まれる。

特に「移動支援」や「行政との連携強化」など、生活上の具体的な課題に対する支援の在り方について、引き続き当事者として提言を行っていくことが期待される。

以上